【論文】

エスニック・ジャーナリストの誕生
――ハワイ沖縄系社会における ビデオ制作者のメディアグラフィー――

白　水　繁　彦

1. 問題の所在

本稿は筆者がこれまで続けてきたローカル（地域）コミュニティやエスニック（民族）コミュニティの文化の変容に関する研究の系譜に連なるものである（白水 1996a；1996b；1996c；1998a；1998b；2001a；2001b；2002；2004a；2004b；2004c；2007；2008a；2008b；2008c；2008d；2009a；2009b；2011a；2011b；2015；2016）（白水・佐藤 2006）。この過程で、筆者は文化の創生を含めた文化変容の実態を把握するために、「変容エージェント」（transformative agent）という概念を案出した（たとえば、白水 2008d, 第１章）。地域や民族のコミュニティの変容にかかわる人びとの意識や行動を明らかにするためである。

変容エージェントとは、コミュニティ文化変容エージェントの省略形で、コミュニティの文化変容にかかわるフォーマル、インフォーマルな活動家である。コミュニティ・リーダーという言葉もあるが、リーダーとエージェントの違いは、リーダーが多少なりともフォロワーがいて成り立つ概念であるのに対し、エージェントは組織（エージェンシー）による使命を遂行する個人や団体はすべてエージェントといえる。またエージェンシーがなくとも個人がある使命感をもって主体的に当該社会のために行動すればエージェントといえる。

ともあれ、変容エージェントは、例えば、コミュニティの公的組織の役員たち（フォーマル・エージェント）やコミュニティの成員のなかの活動家たち（インフォーマル・エージェント）、さらにオルタナティ

ブ・メディアと呼ばれる特定の受け手を想定する小規模メディアの送り手など極めて多様である。かれらはキャンペーンなどをとおして意図的に自らのコミュニティやそれを取り囲む大社会の文化の変容をはかることもあるが、日々のルーティンな活動をとおして当該社会の文化の変容に手を貸すことが少なくない。こうした変容エージェントは、究極なにを目指して活動しているのか。どのような過程を経て変容エージェントになるのか。これが一連の研究における筆者の基本的な問題意識である。

変容エージェントのなかでもエスニック・コミュニティのために活動する人びとをエスニック・エージェントとよぶ。筆者はエスニック・エージェントの活動についてもこれまで数々の実証的研究を続けてきた。そうして、彼ら・彼女ら（以後かれらと表記する）の活動の目的のひとつは、自らのエスニック集団の人びとのエスニック・アイデンティティの涵養にあることを見出し、そのイデオロギーをエスノカルチュラリズムとよぶことにした。エスノカルチュラリズム（ethnoculturalism）とは、エスニック集団の成員は自らの出自を自覚し、エスニック・アイデンティティの形成に邁進すべきであるという信念のことである。そのために自らの民族文化を学ぶことが奨励される。筆者はかつてエスニック文化主義（ethnic-culturalism）とよんでいたが（たとえば〈白水 1998b；2008b；2008c；2011b〉、〈白水・佐藤 2006〉）、より英語的な表現であるエスノカルチュラリズムに改めた（白水 2015）。

エスニック・エージェントのなかでもエスニック・メディアの送り手をエスニック・ジャーナリストとよぶ。エスニック・ジャーナリストは果たしてエスノカルチュラリズムと関連する活動をしているのか。活動しているとすればどのような過程を経てエスニック・ジャーナリストになるのか。これが本稿の問題意識である。

2. 先行研究とリサーチクェスチョン

先行研究

筆者の研究方法はフィールドワークであり、エスニック・エージェントやエスニック・ジャーナリスト、コミュニティ・ジャーナリストのエスノグラフィーの作成を志向してきた（なお、メディアとジャーナリス

トに関るエスノグラフィーをメディアグラフィーと呼ぶ〈Rantanen 2005からヒントを得て命名〉)。エスノグラフィーはできるだけemic(内部者的)な視点を志向するという特徴を持つ(Fettennan 1998:1)。しかもライフストーリーの収集をはじめ非構造化インタビューや半構造化インタビューを主とする典型的な質的調査であり、そこで見出されたことがすぐに一般化できるような類いの研究スタイルではない。一般化に近づくための仮説を提出しそれを彫琢することが目的の調査研究である。

筆者のエスニック・ジャーナリストに関する一連の研究の中で、本稿に照らしてハワイの研究で明らかになってきたことを概略的に示すと、以下のようになる。

まず、コミュニティが有するメディアがあるかどうか。ハワイの人種・エスニック集団のなかでも3番目に大きな日系社会はいくつかの新聞、雑誌、ラジオ、テレビといったマスメディアを有する。いっぽう、そのサブ・コミュニティである沖縄系社会には、定期的なものとしては、ハワイ沖縄連合会(Hawaii United Okinawa Association:沖縄県人会のこと)発行の新聞形式のニューズレター*Uchinanchu*(年6回刊、平均発行部数1万部前後)やケーブルテレビのパブリックアクセス・チャネルに*Hawaii Okinawa Today*がある。ただし、日系社会のなかでも3番目に大きな沖縄系社会の存在はその活動ぶりからも無視できないところがあり、上記の日系メディアや英語の主流メディアには沖縄系社会の出来事などが頻繁に報じられる(白水2004a;2004b;2004c)。

次にエスニック・ジャーナリストの人的側面であるが、自らのコミュニティ内部や主流社会に対して自らの優れた文化や、社会的公正など、強く訴えたいものを持っていること。そのなかのひとつがエスノカルチュラリズムの涵養、育成というわけである。

また特に沖縄系のエスニック・ジャーナリストには幼少時より色濃い沖縄文化のなかで育っていること、しばしば沖縄へ帰省したり、沖縄からの来客があったりして、「母県」との強い交流を保ち続けていることなどの共通項があることがわかった(白水2008b;2008c)。

上記のような先行研究の知見に照らして、本稿で取り上げるのはハワイにおける沖縄系のビデオ制作プロデューサー、ヘンリー・イサラ氏への非構造化インタビューに基づくライフストーリーである。イサラ氏は

HUOA[1] の 2013 年度のレガシーアワード（文化功労賞）に輝いた。その理由として HUOA の機関紙は以下のような活動を挙げている。まず東風平町人会（後述）という HUOA 傘下のローカリティ・クラブ（市町村など出自地域を同じくする人たちのアソシエーション）において会長や顧問を務めるなどの傑出した活動、沖縄系の多くの文化団体のため顧問やリサイタルを開くなどの 60 年以上にわたる奉仕、HUOA スポーツリーグや *Hawaii Okinawa Today* というテレビ放送番組の制作、ハワイ太鼓会等の創始、県人会館であるハワイ・オキナワ・センター建設のための基金募集活動、オキナワン・フェスティバルにおける初年度からの活動などである（Tamashiro 2013:4）。こうした沖縄系コミュニティのための奮迅の活躍ぶりから容易に推察できるように氏は突出したエスニック・エージェントでありエスニック・ジャーナリストのひとりである。これが本稿でイサラ氏を取り上げる理由である。

リサーチクェスチョン

旧知のイサラ氏に今回あらためてインタビューを申し込んだのは、できれば以下の 3 点について氏の経験や考えを通して明らかにしたかったからである。

1．どのような家庭に育ち、少年期はどのような文化状況だったか。
〈第一次集団におけるエスニック文化の刷り込み等基本的社会化の実態を知る〉

2．エスニック・ジャーナリストになるためにどのような訓練を受けたか。
〈送り手としての技能の習得レベルと活動分野との関連をさぐる〉

3．エスニック・ジャーナリストとしてどのような送り意志（志向）をもっているか。そしてそうした考えはどのような過程で獲得したか。
〈受け手に伝えたいと思っていることのひとつはエスノカルチュラリズムか。その考えはどこから来たかといった点を明らかにする〉

なお、実際のインタビューは、予め基本的な質問は用意しておくが、

できるだけ相手の発話意志を尊重するという非構造化インタビュー法を採用した。そのため、話は広範かつ長時間におよんだ。今回は紙面の都合で上記のリサーチクェスチョンに直接的に関係のある部分のみ掲げ、あとは大幅に省略せざるを得ない。全体像の紹介と分析については他日を期したい。

3. インタビュー内容

調査の概略

インタビュー相手：ヘンリー・イサラ
インタビュアー：白水繁彦
インタビュー時：2016 年 8 月 20 日　10 時―13 時
インタビュー場所：ホノルル市内（パシフィック・ビーチホテル）
インタビュー言語：英語
インタビュー相手プロフィール：男性、1932 年生まれ、三世。祖父母とも沖縄系（東風平村、具志頭村出身）、Kochinda chojinkai（東風平町人会）所属、元公務員。2013 年度 HUOA レガシーアワード（文化功労章）受賞

略号：S＝白水による質問等、H＝ヘンリー・イサラ氏の回答。（　　）は筆者による補足。〈　　〉は筆者による解説、考察。

イサラ氏には、これまで 2006 年 3 月 21 日、2007 年 9 月 3 日、2009 年 8 月 26 日と、3 度インタビューもさせていただいた。これらのインタビューの内容の多くが、イサラ氏が中心となって活動してきた沖縄県人会のビデオチームの貢献についてであった[2)]。

インタビューの開始

S：今日はお時間を取っていただき、ありがとうございます。これまでもあなたが HUOA のビデオチームのリーダーということでコミュニティ・メディアに関心を持つ学生といっしょに何回かインタビューをさせていただきましたし、私単独でもお話を伺いました。にもかかわらず、今回またお話をお聞きするのは、私が日本語で書こうと思っているハワ

イのウチナーンチュの活動についての本に、お許しくださるなら、あなたのライフストーリーを収めたいと思っているからです。できるだけ正確を期したいと思い、あらためてインタビューさせていただければ幸いです。もし私の質問に答えたくない場合や、話はするが本には書いてほしくないときはどうぞ、率直におっしゃってください。

H：もちろん、載せていいですよ。答えたくないときは「答えたくない」といいますから。

話者のプロフィール、個人的なバックグラウンド

S：ありがとうございます。ではまず、お名前と生年、世代などから教えてください。

H：ヘンリー・ハジメ・イサラ（Henry Hajime Isara）。三世。1932年12月生まれ。祖父の名はキチゾウ・イサラ。コチンダソン（東風平村）、アザ・トモリ（字富盛）の出身。母方はグシチャン（具志頭）の出身。いまはコチンダソンとグシチャンソンは一緒になってヤエセチョウ（八重瀬町）になっている。

祖父の本当の苗字はイシャラ（Ishara）だが、ハワイに移民した時、移民局でhを省かれてイサラとなったと聞いている。いま沖縄ではイシハラ（石原）という人が多いらしい。10人きょうだいの長男。長男だから日本名はハジメ。7歳違いの弟がいて、いまカリフォルニアに住んでいる。あと8人はすべて女性で、みんなこのオアフ島に住んでいる。

妻はヒロコ・エヴェリン（Hiroko Evelyn Isara）。同じく三世（祖父母は日本本土出身）。息子一人、娘二人。

職業は元公務員（市役所勤務：土木、建設関係）。パートで建設会社で土木製図関連の仕事をした。1990年にすべて引退し、その後オキナワン（沖縄系）・コミュニティをはじめ、地域のためのボランティアに専念している。

HUOAではKochinda chojinkai（東風平町人会）会員[3)]。

S：ご家族のことを少しさかのぼって教えてくれますか？

H：ジジ（祖父）キチゾウ（1888–1986）は、1907年頃にハワイへ来たはずだ。1934年、東風平出身の6人（6家族）とともに東風平村人会を創設した。したがってわが親族はすべて東風平村人会（現在は東風平町人会）の会員。父（1909–1978）も会長や会計をやった。

父は帰米二世[4)]。ハワイで生まれ、幼児のころ沖縄に連れて行かれたらしい。13年くらい沖縄にいた。16歳くらいでハワイに帰ってきたようだ。おそらく沖縄で小学校を終えたはずだが、ハワイでの学歴がないということで、小さい子らに交じって小学校に通ったという[5)]。父も祖父同様私たちきょうだいを必ずといってよいほど村人会のピクニックや新年会などさまざまなイベントに連れて行った。だから村人会の子どもたちや大人たちと会うのは極めて当然のことであり、また楽しかった。

ピクニックと新年会：2大イベントの内容と機能

ウチナーンチュ・アイデンティティのインキュベーター

S：あなたは29歳という若さで東風平村人会の会長になったわけですが、村人会長になったきっかけや村人会の役割などについて思うところをお話しくださいますか？

H：1961年に東風平村人会長になったのはエレクション（選挙）で選ばれたからだ。村人会といえども会長職は忙しいから、自薦はあまりない。私は会長を2年間務めた。任期満了後はアドバイザー（顧問）として10年間ほど後輩会長の相談に乗った。アドバイザーを何年やるかは個人によって異なる。

村人会の元来の目的は相互扶助だが、メンバー間の交流を維持促進するためにピクニックや新年会といった年中行事の開催も村人会の重要な任務である。我が家は特にそうしたイベントをだいじにしてきた。父にとって新年会、ピクニックはとてもだいじだった。父が死んだあとはわれわれが引き継いでやっている。私自身、その両方にずっと参加してきた。欠席したのは兵役に就いていたときだけ。それ以外は全部出席。会長の時はもちろん、アドバイザーになってからもそれを盛り上げようと努力した。

S：それほど新年会やピクニックは重要なんですね。

H：私は村人会を創設した7家族のひとつの家に生まれ、村人会のビッグイベントである夏のピクニックと春の新年会に参加した。当然のように家族親族がうち揃って参加してきた。私の家だけではない、ウチナーンチュはかつて皆そうだった。それがウチナーンチュのウチナーンチュたる所以だ。ウチナーンチュはウチナーンチュの家に生まれれば、小さい時から楽しみながらウチナーンチュとして育っていくというわけ

だ。

とにかく幼いころから私にとって新年会やピクニックはとても楽しいものだった。だれも私を無理やりに連れて行ったわけではない。私は喜んで父に付いていった。それが私には娯楽だった。とくにカチャーシー[6]を踊り、沖縄芸能を身近に楽しむことのできる数少ない機会のひとつだった。ジジやみんなとカチャーシーを楽しく踊ったものだ。そうやって私はウチナーンチュになった（笑）。

S：東風平町人会の場合、ピクニックや新年会にはどれほどの人が参加するのですか？

H：ピクニックは最近はイサラ・ファミリーとチネン・ファミリーだけが参加する。多くて50人。かつてのように子どもが集まらないので成立しないゲームもある。創設の7家族のうち、だんだんと減っていった。

おとなが来ないとその子どもが来ない。するとかれらがおとなになっても来ない。こうしてその家族はずっと来ないということになる。

新年会はピクニックより参加者が多い――その理由

S：では新年会のほうはどうですか。やはり年々寂しくなってきているのですか？

H：新年会のほうはそうでもない。ピクニックよりずっと盛況である。100人以上が集まり、多い時には150人にもなる。だいたい料亭の「夏の家（や）」の大広間（舞台付のほう）でやる。

ピクニックよりはるかに参加者が多い理由は、私が思うにいくつかある。まず村人会のメンバー以外の人もゲストとして連れてきてよいこと。ピクニックは屋外だから頭が熱くなるが料亭（夏の家）だと快適なこと。座っていてごちそうが食べられるし、話したい人といくらでも話せること。おまけに沖縄芸能を楽しめる。エンタテイナーを雇うからだ。ディレックやサンダーなどセミプロが比較的リーゾナブルな出演料で来てくれる。このように、新年会は老いも若きも楽しくすごせる。

それに、沖縄芸能のリサイタルに行かない人は新年会でしか沖縄文化に触れる機会がない。その意味で新年会は沖縄文化とりわけ沖縄芸能の継承永続（perpetuation）にとっても重要な役割を果たしているといってよいと思う。

S：ディレックやサンダーなどはウチナーンチュのさまざまな集まりで演奏しています。あれほどの出演数なのですからプロになれるのではないかと思いますが、それぞれ本業をもっていますね。

H：出演料といってもハワイではチップや交通費といった類いの謝礼なのだ。ここハワイではエスニック文化関係では職業として成り立たない。その点、沖縄や日本とは違う。ハワイでは「本業」が必要。それでもかれらは懸命に沖縄芸能を修練しわれわれに見せてくれる。沖縄の大師匠のところにしばしば行って技を磨いてくる人も少なくない。私はかれらをセンセイと呼ぶ。なぜならかれらを心から尊敬しているからだ。かれらは自分の生活を犠牲にして（sacrificing）文化の継承永続に努めているからだ。だからかれらのリサイタルや芸能関連のワークショップなどさまざまな文化イベントを手伝う。そうやって肩入れする。ビデオチームを続けてきたのもそうしたかれらの活動をアーカイブ（記録保存）したいという思いがあるからだ。

オキナワン・フェスティバルで子ども向けのアトラクションを始める

S：村人会の役割といえば、オキナワン・フェスティバルでも村人会は重要な役割を果たしますね。フェスティバルにはHUOA傘下の50のローカリティ・クラブ（市・町・村・字人会など）がほとんどすべて参加しますね（図1）。あるクラブはサーターアンダーギー（いわゆる沖縄ドーナッツ）を作り、あるクラブは沖縄そばを作るという具合に。東

図1　オキナワン・フェスティバルのオープニング　市・町・村人会の旗が並ぶ（2015年9月5日　白水撮影@ホノルル、カピオラニ公園）

風平はどんなことをするのですか？

H：そう。祖父や父が村人会長としてやらなかったイベントで重要なものは1982年から始まったオキナワン・フェスティバルへの参加である。私はオキナワン・フェスティバルにも子どもを連れてくるべきだと思っていたので、東風平町人会は子どもに喜ばれるもの、子どもが行きたくなるものをやろうと考えた。確かな年度は憶えていないが1985年前後だと思う。最初は子どもの大好きなシェーブアイス（かき氷）も出したし、その後はコーラ瓶への輪投げやボディペインティングなど、さまざまなゲームをやらせた。それも無料かそれに近い額で。そのうちに糸満市人会が加わり、新たなゲームを付加したりして子ども向けのブースを充実させた。人気が上がりゲームの数も増えると少人数の東風平町人会の手に負えなくなり数年前に糸満にまかせて撤退、現在は足ティビチ（豚足スープ）などのフード提供に切り替えた。

〈ハワイの日系社会、沖縄系社会のピクニックは夏に行われるのが一般的で、かつての日本の小学校、中学校の運動会とほとんど同じ内容である。それも道理で、戦前の日本語学校が日系社会の中心的な存在であったころから続いている制度なのだ。子どもや親たちが種々の徒競走やパン食い競争、二人三脚等の障害物競走などゲームを楽しむ。ノートや鉛筆、キャンデーなどの賞品が豊富に用意される。おとなの入賞者には台所用品や掃除用品など実用品も用意される。昼休みやゲームの出番がないときは家族・親族とビニールシートの上で持参の弁当をみんなで楽しむ。筆者は1980年代の半ばから宜野湾市人会のピクニックに断続的に参加しているが、親や子どもたちはほんとうに楽しそうである。それを見る祖父母たちはもっと楽しそうである。

筆者はオキナワン・コミュニティの村人会を「ウチナーンチュ・アイデンティティの孵化器（インキュベーター）」であるという仮説をもっている。具体的には、子どもたちが幼少時からムラ単位のイベントであるピクニックや新年会などにおいてウチナーンチュとウチナーンチュ文化に触れ続けることで意識の深層部分にウチナーンチュとしての心構えがインプリントされるというものである（白水・佐藤 2006）。筆者のこの仮説が正しいとすれば、ピクニックが廃れていくということは将来のオキナワン・コミュニティにとって由々しきことである[7)]。東風平町人

会の場合、新年会はあまり減っていないようなのでインキュベーター仮説からいえばまだ大丈夫といえそうである。さらに、オキナワン・フェスティバルでも子ども向けのブースが設置され、年々そのサービスは充実して、ミニゴルフや巨大滑り台などテーマパークのようになっている。それに伴い、子連れの入場者数は急増した。始めたのが東風平町人会というのは興味深い。村人会のピクニックや新年会をとおしてウチナーンチュとしての心構えが形成されていくということを経験上知っているイサラ氏は、オキナワン・フェスティバルにも子どもを招き入れ、小さい時から沖縄的文化に馴染ませようと考えたのであろう。〉

第1回スタディツアーの衝撃

S：オキナワン・フェスティバルといえば、その創始に関った若者たちはその前にスタディツアーで沖縄に行っていますね。あなたはその時どうしていたのですか？

H：そう、1980年、HUOAは沖縄へハワイのウチナーンチュの若者をスタディツアー（研修旅行）に連れて行った[8)]。この時はHUOAの各市町村人会から選ばれた若者37人が参加した。HUOA初の試みであるこのスタディツアーは大成功だった。というのは、このツアーに参加した若者の多くが、後にオキナワン・コミュニティのさまざまな分野でリーダーシップを発揮することになったからだ[9)]。私はこの時は事情があり参加しなかった。

私が初めて沖縄へ行ったのは1985年のスタディツアーの時である。この時の感動は忘れられない。初めての沖縄のはずなのになぜか初めてという気がしなかった。訪問というより帰郷、まるで故郷に帰ってきたような懐かしさを感じたのだ。

以後、私のボランティア活動にも拍車がかかり、それまでどちらかといえば村人会中心の活動だったのが、次第に県人会の活動にも進んで参加するようになった。

まず、県人会のカルチャーセクションの座長になり、1987年にはエド・クバ会長体制の監査役になった。そして、前に話したとおり、1997年、県人会にビデオ制作チームが結成されたとき参加したというわけだ。

沖縄との交流を円滑にするために日本語を勉強

S：あなたは近頃、私との会話のなかで、ハイサイとかニフェーデービルとか、しばしばウチナーグチ（沖縄語）を挟むが、あなたはそのうち「HUOAの公用語をウチナーグチにしよう」といいだすのではないですか？

H：そうなると最高だね（笑）。叶わぬ夢だね（大笑）。なにしろウチナーグチはおろか日本語も難しいからね。じつは、われわれの世代にとってウチナーグチは非常に難しいというイメージがある。日本語より難しい。それに、われわれの世代と付き合いのある沖縄の人びとは全員日本語を話す。よほど田舎の年寄でないかぎり、われわれにウチナーグチで話しかける人はいない。しかし、伝統芸能を理解するにはウチナーグチがわからなければならないし、ウチナーンチュらしさを表現するにはやはりウチナーグチになる。県人会の会合が英語になって随分楽にはなったが、これほど沖縄との交流が盛んになると日本語やウチナーグチができないことのデメリットも少なくない。

ちゃんとした日本語ができるに越したことはないというのは一世のころからいわれたことだ。日本語が上手に話せないということでヤマトゥンチュ（ナイチともいう。日本本土出身者）に差別された経験があるからだ。私は県人会の諸活動にかかわるようになったら、沖縄から来る人、とくに芸能団の人びとと交際する必要が出てきた。特にHUOAのビデオ制作チームを引き受けてからは沖縄からの訪問団には率先して会い、映像記録を撮るようにした。かれらはかなり頻繁にやってくる。各流派のハワイ支部に指導を兼ねてやってくるからだ。それらの多くの面倒をこまめに見るキヨシ・キンジョウの熱意に感じるところもあった私は、できる限り沖縄からの芸能団とは付き合うことにした。

問題は、彼らは英語がわからないし、私は日本語がわからないということだった。そこで一念発起、自分で日本語を話せるようになろうと決心し、市役所の勤めが終わってからナイトスクールに通うことにした。おかげでなんとか日本語で意志の疎通はできるようになった。沖縄から来る人も私が下手ながら日本語を話すので随分助かると言ってくれた。

S：あなたはいろいろとコミュニティのためのボランティアをやっていますが、そのなかでもビデオ制作チームでの活躍で知られています。まずビデオ制作の話を聞かせてください。

H：そうだね、いろいろボランティアをやってきたが、なかでもビデオチームの仕事が最も忙しいし、自分にとって重要だと思っている。このチームがHUOA（県人会）に結成されたのは1997年。中心的なメンバーは10人くらい。それに加え10人程度が絶えず出たり入ったりしている。自分は沖縄芸能をはじめ沖縄文化が好きなので、映像番組を制作したり、映像記録として残すという計画に賛同し、最初から参加している。番組を作り、ケーブルチャンネルのオレロ[10]（‘Olelo）で放送するためにはちゃんとした技術が必要だ。幸いオレロがディレクションやカメラワーク、編集などの技術講習プログラム（ビデオ制作コース）を持っており比較的安価に学ぶことができる。私もほかのスタッフ同様、このコースに通って基本的な技術を身に付けた。費用はもちろん県人会が出してくれた。オレロはオキナワン・フェスティバルの際など大きなイベントの時はスタッフも提供してくれるし、編集用の器材を備えた大型バンも貸してくれる（図2）。とても頼りになる存在だ。

われわれが作っている番組は*Hawaii Okinawa Today*というチャネル53で放送されている番組だ。ケーブルテレビかネットで視聴することができる。かつては毎週放送分制作していたが現在は基本的に月2回分である[11]。

図2　オレロのバン（2000年9月2日　白水撮影＠ホノルル、カピオラニ公園）

ビデオ制作で最も骨の折れる作業は編集（editing）である。ハワイ沖縄センターにある映像編集専用の部屋に籠りコンピューターに向かって編集作業を長時間にわたり行うのは心身とも疲れるものである。2009年、チームリーダーの座

をスティーブに譲ってからも私は編集作業のかなりの部分を担当している。

リーダーとして最も厄介かつ重要な仕事はオキナワン・フェスティバルだ。このイベントは、あなたも知っている通り、毎年レイバーディ週末の2日間盛大に行われる。この祭のステージ上のパフォーマンス全ておよび会場内の様子など朝から夕方までびっしり撮影し、*Hawaii Okinawa Today* の主要なコンテンツとする。リーダーはオレロとの交渉、スタッフ（ボランティア）の確保、かれらのシフトの作成、カメラワークの確認、編集作業等々、忙しいうえに責任の重い仕事だ。プロデューサーとディレクター、編集作業と様々な役割を一手に引き受けている感じだ。

私はリーダーの座を譲った今もフェスティバルの2日間、朝7時からその日のスケジュール終了まで（初日土曜はステージが終わったあと恒例の盆ダンスがあるから8時くらいまで、二日目の日曜は6時くらいまで）オレロのバンの中で粗編集をやる。ぶっ続けの仕事で、時にはシシ（小便）に行く暇もないほどだ。

オキナワン・フェスティバルのためのスタッフは30人いれば理想だが実際は20人来ればいいほう。20人とはいえすべてが2日間いるわけではない。朝だけの人もいるし午後3時間だけという人もいる。現場で絶対に欠かせないのはステージのパフォーマンスを撮るカメラマン。炎天下の撮影なので、シフト制にしているが最低2時間は撮影しなければならない。どうしても最低7人は必要。いまはオレロから職員（インストラクター）や生徒が実習で来てくれるので何とか回っており、助かっている。長女のドナが2日間、粗編集などを手伝ってくれるのも大きな助けとなっている。

あと、*Hawaii Okinawa Today* のコンテンツとしては、ハワイに20近くある琉球芸能の教室のリサイタル（発表会を含む）、ハワイ大学や東西センター主催の沖縄関係のシンポジウムやワークショップをカバーする。

職業生活――コンピューターとの出会い

S：あなたは編集作業のデジタル化にも対応しているし、失礼ながら、年齢の割に容易にコンピューターを操作しますが、職業上のキャリアと

関係があるのですか？

H：中学生のころから建築関係で働きたいと思っていた。だから高校時代も土木製図の授業を履修したくらいだ。その後は短大に入り土木製図を学んだ。しかしすぐに朝鮮戦争（1950年6月25日―1953年7月27日休戦）が始まったので沿岸警備隊に入った。隊ではニューヨークやハワイで勤務した。1954年の除隊後、大学に入り本格的に製図等の勉強を続けようとしたが、下に9人もきょうだいがいるので家計を助けるためにも働かなければならならなかった。結局大学は卒業できなかった。そうして、見習い配管工になった。その後建設現場で監督の仕事などをしているうちにホノルル市の職員（公務員）として雇われた。昼は公務員として土木製図の仕事や公共住宅関連の検査官などを務め、1985年に市役所を退職。32年間の公務員生活であった。市役所を退職してからは市役所時代から夜パートで働いていた建設会社にフルタイムとして復帰、1991年まで働いた。ホノルル市では幹部でなければ公務員であってもアルバイトは認められていたのだ。

この建設会社にいてよかったのはコンピューターの操作を習得したことだ。というのは建設会社の後継者がコンピューター製図を導入したのだ。私はすでに53歳になっていたが、コンピューターを駆使してさまざまな仕事をすることを学んだ。

〈このときコンピューターに慣れていたのが幸いし、後にビデオの編集作業に生きることになる。80歳をとうに超えてコンピューターで映像編集をする人はハワイ広しといえども多くはないだろう。ところで、イサラ氏もかつて公務員であった。公務員または元公務員のボランティアは非常に多い。かれらは比較的高学歴でありリタイア後の生活基盤も比較的安定している。かなり込み入った計算や文案作成をこなす仕事などを含む多種多様な役割からなるコミュニティ・イベントの遂行には適合性の高い人材であるといえよう。イサラ氏はその典型のひとりである。高齢者の彼の存在はリタイア組に勇気と希望、そして何より無言の叱咤激励を与え続けているようである。〉

ジャパニーズかオキナワンか　アイデンティティをめぐって

S：話は少し変わりますが、最近「自分はジャパニーズではない、ウ

チナーンチュだ」と主張する人が出てきました。そうした傾向は多分、1990年代に入ってから顕著になったと思う。これはオキナワン（ウチナーンチュ）というエスニック・アイデンティティの表明だといってよいかと思います。かれらはジャパニーズというエスニシティではなくオキナワンというエスニシティを「発見」もしくは「創造」しようとしているのではないか[12)]。

こうした現象をあなたはどう思いますか。また、自分のアイデンティティをどうとらえていますか？

H：「自分はオキナワンだ、ジャパニーズではない」というような人はあまり多くないと思う。あなたはオキナワン・フェスティバルに何年も通ったり、「世界のウチナーンチュ大会」や沖縄芸能の集まりなどに出かけることが多いからそういう連中の話を聞く機会も多いだろう。しかし、それほどの知識や関心を持つウチナーンチュはむしろ少ないと私は思う。

ともあれ、私は何者かと問われれば、最初にアメリカンつまりハワイのアメリカン、次にジャパニーズ、三番目にオキナワン。オキナワンは最後に来る。もっとも、心情的にはオキナワンが最も強いと思うが。ハワイのアメリカンが最初に来るのは、まず、ハワイはアメリカの州の一つであることだ。そして私はハワイに生まれて育った。ハワイの文物に囲まれて育ったわけで、沖縄の文物に囲まれて育ったわけではない。私は長年ボーイスカウト活動をしてきたので立派なアメリカ国民であることの重要性を学んだ。また、私の子どもたちにもボーイスカウトやスポーツ活動などに勤しませたので、自然にPTAなどの社会活動も熱心に取り組んだ。だからアメリカのことハワイのことを重要だと考えるようになったと思う。

私は自分がジャパニーズではないなどとは思わない。じっさいのところ沖縄県は日本の一部だし、そこからわれわれの先祖がやってきた。それを取り去ることはできない。現に私はセンサス（国勢調査）の民族の欄にはジャパニーズであると書く。中にはわざわざオキナワンと書く人もいると聞いたことがあるが、私はジャパニーズと書く。とはいえ、単なるジャパニーズではない。沖縄の歴史を学び、かつては琉球王国という独立国であったことや独自の素晴らし文化があるということを知れば、単なるジャパニーズであるとは思わないだろう。じっさいジャパニーズ

でもありウチナーンチュでもあるということはアイデンティティの上でも少しも問題とはならない。先にふれたように、ハワイのウチナーンチュにも沖縄の文化のこと、歴史のことを全く知らないという人は意外と多いものだ。ましてや沖縄の文化に触れるチャンスのない他州や他国のウチナーンチュは自分が何者であるか皆目わからないだろう。そういう人が「アイデンティティ・プロブレム」に直面するのだ。私の場合、沖縄の歴史や沖縄文化のことを学べば学ぶほど自信をもって「ウチナーンチュである」といえるようになった。だからといって、私のなかではジャパニーズとウチナーンチュは対立するものではない。たくさんいるウチナーンチュの中には「自分はアメリカンであり、ウチナーンチュであるが、ジャパニーズではない」という人がいるかもしれない。それはそれでよいと思う。人それぞれなのだから。

ハワイの場合、多種多様の文化が共存しており、民族祭など、それぞれが自分たちの文化を表出することが自由に行われるところだ。なにしろ、少数派のギリシャ人でさえもギリシャ祭を催している。私はそうした祭に行って、独特の料理を食べるのが大好きである。こうしたハワイの多文化的状況のなかだから、われわれも自信を持ってウチナーンチュ精神や文化を謳歌することができるし、ウチナーンチュだけでなく、多くの人がそれを楽しんでくれるのである[13)]。

コミュニティ活動の原動力

S：あなたは50年以上にわたってコミュニティ活動とりわけ沖縄文化の維持継承ためのボランティア活動をしてきたわけだが、その原動力は何だと思うか？

H：難しい質問だ。たぶんジジがカチャーシーが上手で、芸事が好きだったのが影響を与えたかもしれない。自分は幸運なことにウチナーンチュの家に生まれウチナーンチュとして育ったということだろう。私は長年いわゆるボランティアをしてきたが、楽しいからやってきたのだ。そのことははっきりいえる。そして一緒に働いた人が私を楽しくさせてくれた。かれらは自分の生活を犠牲にして（sacrificing）コミュニティのために尽くした人が多い。約10億円を要した県人会館「ハワイ・オキナワ・センター（HOC）」（図3）建設の際、募金委員長として1986年頃からわずか3年余りで竣工に漕ぎつけたエド・クバなどはそのうち

図 3　約 10 億円の巨費を投じた「ハワイ沖縄センター」（2004 年白水撮影@オアフ島のワイピオ）

の一人だ。かれらは沖縄文化の永続をはかる（perpetuate）ために、自分の生活を犠牲にして（sacrificing）働いた。そして、かれらと働くことが私にとって喜びだった。

〈この後、インタビュー相手イサラ氏から、筆者がなぜ沖縄系の研究をするようになったかという質問があり、それについて筆者が答え、それにまたイサラ氏が質問するという展開になった。たいへん意義深い会話となったが、このレポートの本筋とは異なるので割愛する。

なお、イサラ氏は 2013 年度のレガシーアワードを受賞したことに感謝し、HUOA の機関新聞（ニューズレター）*Uchinanchu*（No.147, Nov/Dec/2013:3）に御礼広告を寄せている（図 4）。これには、氏のハワイのウチナーンチュや沖縄文化に寄せる思い、そしてその因ってきたるところが率直に述べられている。本論の趣旨からみてきわめて意義深いこの文章を、イサラ氏の許諾を得て、抜粋し翻訳する。〉

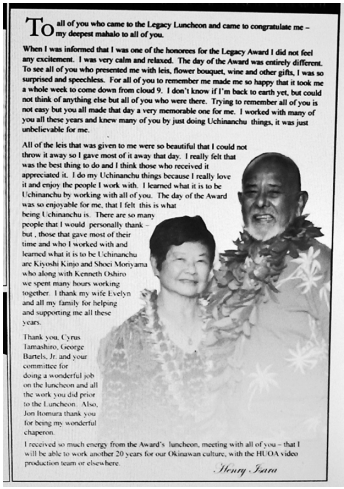
「Ippei Nihei Deebiru, Arigato, Mahalo and Thank you very much」

レガシーアワード授賞昼食会に来てお祝いをくださったかたがたへ厚くマハロ[14] を申し上げます。（中略）

私がずっとウチナーンチュ・コミュニティのためのボランティアをやってきたのはそのことが好きだからですし、ビデオ制作をはじめさまざまな活動を楽しみながらやってきました。そしてウチナーンチュの仲間たちと活動することで、ウチナーンチュの何たるかを学びました。レガシーアワードを頂いた日、私は仲間たちからの祝福を浴びながら、ウチナーンチュであることの喜びを心の底から感じていました。

私はたくさんの人びとに感謝をしているのですが、なかでも特に御礼を申し上げたいのは、ずっと一緒にボランティアをやり、私にウチナーンチュの何たるかを教えてくれたキヨシ・キンジョウ、ショウエイ・モリヤマ、そしてケネス・オオシロの諸氏です。また、私をずっと支え、協力してくれた妻のエヴェリンをはじめ家族にも感謝しています。（中略）

この賞を頂き、たくさんの人びとに祝っていただいたおかげで、私はいっそう元気になりました。このぶんだとまだ20年はHUOAのビデオ制作チーム等の仕事をとおして、わが沖縄文化のために働けそうな気がします。　ヘンリー・イサラ


To all of you who came to the Legacy Luncheon and came to congratulate me – my deepest mahalo to all of you.

When I was informed that I was one of the honorees for the Legacy Award I did not feel any excitement. I was very calm and relaxed. The day of the Award was entirely different. To see all of you who presented me with leis, flower bouquet, wine and other gifts, I was so surprised and speechless. For all of you to remember me made me so happy that it took me a whole week to come down from cloud 9. I don't know if I'm back to earth yet, but could not think of anything else but all of you who were there. Trying to remember all of you is not easy but you all made that day a very memorable one for me. I worked with many of you all these years and knew many of you by just doing Uchinanchu things, it was just unbelievable for me.

All of the leis that was given to me were so beautiful that I could not throw it away so I gave most of it away that day. I really felt that was the best thing to do and I think those who received it appreciated it. I do my Uchinanchu things because I really love it and enjoy the people I work with. I learned what it is to be Uchinanchu by working with all of you. The day of the Award was so enjoyable for me; that I felt this is what being Uchinanchu is. There are so many people that I would personally thank – but , those that gave most of their time and who I worked with and learned what it is to be Uchinanchu are Kiyoshi Kinjo and Shoei Moriyama who along with Kenneth Oshiro we spent many hours working together. I thank my wife Evelyn and all my family for helping and supporting me all these years.

Thank you, Cyrus Tamashiro, George Bartels, Jr. and your committee for doing a wonderful job on the luncheon and all the work you did prior to the Luncheon. Also, Jon Homura thank you for being my wonderful chaperon.

I received so much energy from the Award's luncheon, meeting with all of you – that I will be able to work another 20 years for our Okinawan culture, with the HUOA video production team or elsewhere.

Henry Isara

図4　イサラ氏によるレガシーアワード御礼広告（*Uchinanchu* No.149, 2013:3）

〈イサラ氏は私と4時間以上にわたって話し続けた。筆者との長年にわたる付き合いによって気楽に話す雰囲気もあったことも大きいだろう。ともあれ、誠実に包み隠さず語ってくださったイサラ氏の厚情に深く御礼申し上げる。〉

4. 考察

先に本稿の課題として3点ほどのリサーチクェスチョンを挙げておいた。本章では一応のまとめとして、それぞれについて考察を加えたい。

1. どのような家庭に育ち、どのような文化状況（たとえばエスニック文化の状況）で育ったか。このリサーチクェスチョンを設けた理由は、氏の回答から第一次集団における文化的刷り込みなど基本的社会化の実態を知ることができるのではないかという期待があったからである。

イサラ氏は祖父が村人会結成に関り、父が帰米二世すなわち少年期まで沖縄で過ごしたという色濃い沖縄文化の家庭に育った。しかも幼少時から村人会活動にどっぷりと浸ったという意味で基本的な社会化は沖縄文化のなかでなされたと考えてよいだろう。将来コアなウチナーンチュになるための「文化的刷り込み（インプリンティング）」、換言すれば「下染め」[15] はできていたといえよう。

2. エスニック・ジャーナリストになるためにどのような訓練を受け、どのような職業に就いたか。これは第二次集団における社会化の実態を知るため、また職業とボランティア内容との関連性をさぐるためのリサーチクェスチョンである。

中学生の段階ですでに建築関係の道に進みたいと思っていたそうだが、それが誰の影響によるものなのかは語られなかった。ともあれ、高校、職業学校まで土木製図関連の教育を受けた。朝鮮戦争の影響で入隊し、ニューヨーク勤務を経験するなど「外の世界」を見ることになる。ここで、正真正銘の「ロコボーイ」（ハワイローカルの少年）から国防、国域、対外国を考える「国民」、それもかなり国家主義的な考えを受け継ぐ国民へと脱皮する。このことがイサラ氏のアイデンティティと大きく関わることとなる。除隊後、土木、建設の仕事に入る。この段階からしばらく製図はいわばアナログであったが、後年コンピューターが導入され製図関係もデジタル化される。コンピューターやデジタルとの親和性が後のビデオ編集作業に生きてくる。年齢の割に編集のデジタル化に適応し、長くビデオ制作に携わることができた素地が職業生活でできあがっていたのである。どのようなボランティアに関るかということもどのような技術的素地を持っているかでかなり決まってくるといえそうである。とはいえ、ビデオの編集技術等専門的なことは費用も高い学校などに通わなければならないところだが、米国のパブリック・アクセスの制度のおかげでNPOのコースに通って身に付けることができた。こうした多数のNPO、そして大学などの市民向け講座が市民ジャーナリスト輩出の下支えとなっていることに注目したい。

3. エスニック・ジャーナリストとしてどのような送り意志（志向）をもっているか。これはコミュニティの人びとに伝えたい重要な事柄のひとつとしてエスノカルチュラリズムが含まれているかどうか、そして、その考えはどこから来たかをさぐるためのリサーチクェスチョンである。

イサラ氏は多くの芸能団体のアドバイザーを務めただけでなく、自らも太鼓や三線、ウチナーグチを学ぶなど、伝統文化の実践も試みている。また、彼はインタビューのなかでしばしば、「沖縄文化に接することができない人は気の毒である」なぜなら「そのような人はウチナーンチュ・アイデンティティの不在、すなわち『アイデンティティ・プロブレム』に陥るからだ」と口にした。氏がアイデンティティの喪失状態をアイデンティティ・プロブレムという言葉で表現しているということは、ウチナーンチュはウチナーンチュ・アイデンティティを持ってしかるべきだ、と考えていることになる。このことから、イサラ氏はエスニック・エージェントとしても、エスニック・ジャーナリストとしても、コミュニティの人びとにエスノカルチュラリズムを植え付けたいのではないかと思われる。

そうした考え方は、幼少時、少年期においては村人会というエスニック・アイデンティティのインキュベーターをとおして「下染め」「インプリント」された無自覚的なウチナーンチュ意識が、キヨシ（沖縄芸能愛好者でリサイタルの裏方として尽力）やショウエイ（アーティストとしてボランティアで舞台装置や夥しい数のフェスティバルの小道具などを制作）ら、より強いエスノカルチュラリズム、いわばウチナー・カルチュラリズム（Uchina-culturalism）を持つ人びとや「母県」沖縄への「巡礼」、沖縄からの訪問者との度重なる交流をとおして自覚的なウチナーンチュ・アイデンティティへと進化、昇華させた結果かと思われる。

なお、イサラ氏はインタビュー中、何度も、文化の perpetuation、センセイはじめ人びとの sacrificing という語を口にした。前者は沖縄文化を継承し永続化をはかりたいという文脈で出てきたし、後者はハワイにおける沖縄文化は芸能の教師をはじめボランティアの人びとの犠牲的精神のおかげで維持継承されているという文脈で出てきたものである。イサラ氏が日頃から最も気にかけていることだから口をついて出て来たのであろう。

本稿のもととなった調査研究は平成 28 年度駒澤大学特別研究助成および平成 28 年度武蔵大学総合研究所研究助成（代表 アンジェロ・イシ 社会学部教授）を受けている。関係諸氏に厚く御礼申し上げたい。

注

1） HUOA = Hawaii United Okinawa Association は 1951 年 United Okinawan Association of Hawaii ハワイ沖縄人連合会として発足。1972 年、母県沖縄の「本土復帰」に伴い日本語名称をハワイ沖縄県連合会へ、そして 1995 年、Hawaii United Okinawa Association、ハワイ沖縄連合会と改称し今日に至る。イサラ氏が所属する東風平町人会をはじめ約 50 の市・町・村・字人会等が HUOA を組織している。多数の村人会等が集まって作った県人会ということでハワイ沖縄「連合会」と称するようになった。

2） このインタビューに加えて、考察や「まとめ」の部分では筆者が行った 2006 年 3 月 21 日、2007 年 9 月 3 日、2009 年 8 月 26 日のインタビューで得た情報も適宜付加する。なお、筆者が第 6 回世界のウチナーンチュ大会に参加するために訪れた沖縄に滞在中、やはりイサラ氏夫妻も同大会に参加していた。筆者は氏の祖父母の出身地八重瀬町の町史制作スタッフがイサラ氏にインタビューを試みる場面に遭遇、筆者が通訳と解説の役を務めることになった（2016 年 10 月 31 日、那覇市パームロイヤルホテルにて）。そこで話されたことのほとんどはすでに筆者がイサラ氏との何回かのインタビューで聞いてきたことであったが、イサラ氏の家系図についての話は詳しくは聞いたことがなかった。その詳細はいずれ八重瀬町史に反映されるであろうから、本稿ではふれなかった。

3） 東風平村人会は沖縄の東風平村が東風平町となったこと（1979 年）に伴い東風平町人会と改称。なお、東風平町は 2006 年、南隣の具志頭村と合併して八重瀬町となる。

4） 帰米二世とは戦前にハワイや米本土で生まれた二世のうち、日本へ送られ日本で養育、教育を受けた後、戦前または戦後にハワイや米本土に帰ってきた者。生まれながらに米国籍を有するが、日本国籍も持つ者が少なくない。

5） 10 歳過ぎてアメリカ、ハワイに移民した外国人が、年下の子らと小学校に通ったという例は少なくない。一定の年齢に達し仕事などの都合で小学校に通えない場合はナイトスクールに通う場合が多い。

6） カチャーシーとは沖縄の手踊り。三線の速弾きもいう。結婚式や祭の際にみんなで踊り楽しむ。カチャーシーは参加者が多いほど盛り上がる。

7） 筆者はハワイのコリアン・コミュニティのピクニックも参与観察したが（2008 年 9 月 1 日、カピオラニ公園）、戦後移民の比率が高いこともあり、ピクニックも活気があり、運動会も盛り上がっていた。筆者が注目したのはそればかりでなく、プログラムや雰囲気も日系のそれと驚くほど似ていたことである。これもまた新たな研究テーマとなり得るだろう。

8） 沖縄からのハワイ移民 80 周年を契機にハワイの沖縄系の若者を沖縄の自治体が「招待」することになった。これは戦後戦争で荒廃した「母県」

を救おうと膨大な救援物資を送ったハワイのウチナーンチュへのお礼の気持ちだったといわれる。なおこの救援物資のなかに農業振興のための種豚550頭や幼児の栄養補給のための搾乳用ヤギ600頭余りも含まれていた。スタディツアーの受け入れ（「招待」）は、こうしたハワイのウチナーンチュの胆心（ちむぐくる）に対する沖縄県民からの返礼のひとつである。

9） かれらは「心に火が点いた」「ほんとうのウチナーンチュとして生まれ変わった」などと自らを表現した（白水 2008b）。たとえばオキナワン・フェスティバルを創始（1982年）したり、ハワイ沖縄センター建設（1990年竣工）の原動力になったりした。

10） オレロとはハワイ語で「声」とか「話す」という意味。米国のパブリック・アクセスの制度のもと、地元ケーブルテレビ会社の出資で賄われる非営利放送局。少数派の意見発表の場、すなわちアクセス権確保の場として発足。こうした制度は全米で行われている。詳細は同組織のウェブサイトhttp://www.olelo.org/ 参照。2017年2月10日閲覧。

11） *Hawaii Okinawa Today* の放送は毎週行われ、現在は毎週木曜日午後5時から約1時間オレロの53チャンネルで見ることができる。インターネットでも視聴可能である。ちなみに、2017年3月のスケジュールを見ると過去のフェスティバルの映像を繰り返し流していることがわかる。2016年度のフェスティバルがハリケーンの影響で中止になったので、やむを得ないところではある（http://www.olelo.org/tv/　2017年2月10日閲覧）。

12） たとえば「世界のウチナーンチュ大会」のヤング・オキナワンの集まりなどでは、南北米の若い沖縄系のスピーカーが口々に「自分はジャパニーズではない、ウチナーンチュだ」と声高らかに表明した。筆者は1995年の第2回大会、2000年の第3回大会でそれを目撃た。

13） 先行する民族祭としては1950年代から続く中国系の「水仙まつり」（中野 2015:125）や日系の「桜まつり」がある。桜まつりはホノルル日本青年会議所主催で毎年1月から3月にかけて開催される。桜祭りのメインイベントは「桜の女王（Cherry Blossom Festival Queen）」を決定するコンテストである。なお、多くのエスニック集団が民族祭に本格的に参入するのは1980年代以降の傾向であり、オキナワン・フェスティバル（1982年開始）が与えた影響は少なくないと思われる。

14） Mahalo とはハワイ語で感謝をあらわすことば。ハワイでは普通に Thank you の代わりに、または Thank you と並べて用いられる。なお Ippei Nihei Deebiru とはウチナーグチで「たいへん・ありがとう・ございます」の意。他に Ippee Nifee Deebiru などさまざまな綴りが用いられる。ウチナーグチの発音の難しさ故の結果である。

15） 「下染め理論」。もともとは柳田國男の説だといわれる（民俗学者鎌田久子氏の教示による）。真っ黒に染めるためにはまず赤などで染めておき、

それを黒い染料に浸すと、より黒く染めあがるという。文化や精神の獲得も同様のプロセスを経るというもの。村人会で「下染め」し、県人会等の活動で真っ黒に染め上げる。こうして強靭なウチナーンチュができあがるというわけである。

参考文献

Fettennan, David（1998）*Ethnography : Step-by-Step.* Sage Publications.

中野克彦（2015）「ハワイの中華文化」をめぐるポリティクスと新民族文化の創出：1940 年代後半の中国系民族文化運動と民族祭」白水繁彦編著『ハワイにおけるアイデンティティ表象：多文化社会の語り・踊り・祭り』御茶の水書房

Rantanen, Terhi（2005）*The Media and Globalization.* Sage Publications.

新保満・田村紀雄・白水繁彦（1991）『カナダの日本語新聞』PMC 出版

白水繁彦（1996a）「エスニック・カルチュラリズムの時代」武蔵大学公開講座委員会編『国際化時代の社会学：変動期を生きる市民のために』御茶の水書房

白水繁彦（1996b）「エスニック・コミュニティの情報文化：群馬県大泉町のブラジル人コミュニティの事例を中心に」『武蔵大総学合研究所紀要』No.6

白水繁彦編著（1996c）『エスニック・メディア：多文化社会日本をめざして』明石書店

白水繁彦（1998a）『エスニック文化の社会学：コミュニティ・リーダー・メディア』日本評論社

白水繁彦（1998b）「エスニック・アイデンティティの覚醒運動」『武蔵大学総合研究所紀要』No.7

白水繁彦（2001a）「グローバリゼーションと異文化間接触――メディア・国際移動・対日イメージ――」武蔵大学編『社会と比較文化』御茶の水書房

白水繁彦（2001b）「多文化状況とエスニック・メディアの送り手：ハワイの日系エスニック英語新聞『Hawaii Herald』をめぐって」『武蔵大学総合研究所紀要』No.11

白水繁彦（2002）「エスニック・メディアの変容：メディア社会学の視点から」『移民研究年報』第 8 号

白水繁彦（2004a）「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承」『移民研究年報』第 10 号

白水繁彦（2004b）『エスニック・メディア研究』明石書店

白水繁彦（2004c）「ハワイのエスニック・メディア」後藤明他編『ハワイ研究への招待』関西学院大学出版会

白水繁彦・佐藤万里江（2006）「エスニック・コミュニティのリーダーシップ

～ハワイ沖縄系社会にみるエスニック文化主義の普及活動～」『武蔵大学総合研究所紀要』No.15
白水繁彦（2007）「フェスティバル、フード、そしてアイデンティティ～ハワイにおける「沖縄料理」の政治学序説」『武蔵大学総合研究所紀要』No.16
白水繁彦（2008a）「異なる視点でニュースを見る人たち一送り手のメディアグラフィー調査から」小玉美意子編著『映像時代のニュースリテラシー』新曜社
白水繁彦（2008b）「変容エージェントによる文化の創生一ハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究」白水繁彦編著『移動する人びと、変容する文化』御茶の水書房
白水繁彦（2008c）「コミュニティ・ジャーナリストの志向と役割」『ソシオロジスト』（武蔵大学社会学会）No.10
白水繁彦編著（2008d）『移動する人びと、変容する文化：グローバリゼーションとアイデンティティ』御茶の水書房
白水繁彦（2009a）「エスニック・マイノリティとメディア」浜田純一・田島泰彦・桂敬一編『新訂　新聞学』日本評論社
白水繁彦（2009b）「メディアとローカル化：ハワイのコリア語メディアと主流メディアの事例から」『Journal of Global Media Studies』Vol.6
白水繁彦（2011a）『イノベーション社会学 普及論の概念と応用』御茶の水書房
白水繁彦編著（2011b）『多文化社会ハワイのリアリティー：民族間交渉と文化創生』御茶の水書房
白水繁彦編著（2015）『ハワイにおけるアイデンティティ表象：多文化社会の語り・踊り・祭り』御茶の水書房
白水繁彦（2016）「ディアスポラ・エージェント研究：オーストラリアにおけるブラジル映画祭主催者の事例」『Journal of Global Media Studies』No.19
田村紀雄・白水繁彦編著（2007）『現代地域メディア論』日本評論社
Tamashiro, Cyrus（2013）‘2013 HUOA Legacy Award Banquet’ in *Uchinanchu,* No.147, Nov/Dec, Hawaii United Okinawa Association.